

図5 新体力テスト測定項目の年次推移 (11歳、1998年対比)

の経験が少な
いことも指摘
されており、
小学校におい
ても引き続き
運動遊びの中
で多様な動き
を獲得し、5
年生から6年
生で行う「体
の動きを高め
る運動」に移
行することに

ることである。また、この年から体力・運動能力調査の見直しが行われ、一部の測定項目が変更されている。図5に示す通り、新体力テストの測定項目の多くも測定開始時(1998年)から記録が向上している。

これらの要因の一つとして1998年に告示された学習指導要領にそれまでの「体操」にかわり「体づくり運動」が導入されたことに注目したい。2017年に新たに告示された小学校

学習指導要領において、体づくり運動の内容は、「体ほぐしの運動(遊び)」、「多様な動きをつくる運動(遊び)」、「および」体の動きを高める運動」に分かれる。小学校1年生から4年生で行う「多様な動きをつくる運動(遊び)」は、友達との関わりを通して、楽しく遊びをする中でさまざまな動きを行い、体の基本的な動きを総合的に身に付けることをねらいとしている。現在の子どもは幼児期に運動遊び

より、体力を高めることが可能になってきたと考えられる。

YSJLJ

子どもの運動実施の二極化が顕著となっている現代において、学校の体育の授業は、日常的にスポーツや運動を行わない子ども達にとって身体を動かす機会となる。2017年に告示された小学校学習指導要領の体育科

においては、運動の技術や技能を向上することに重点を置いていたこれまでとは異なり、多様なスポーツの楽しみ方を共有することが目標になっている。つまり、これからの体育科教育は「運動の実施を『できる・できない』という観点で区別するのでなく、子ども達が運動することに興味を示し、自ら進んで「やってみよう」という気持ちにすることに重点が置かれるであろう。それが運動を継続するための原動力となり、体力・運動能力の向上につながっていく。

- 毎年発表される体力・運動能力調査の結果に一喜一憂することなく、体育科の授業や学校生活において子ども達が運動を楽しむことが重要になってくると考えられる。(いしかわたくじ)
- 引用文献
- (1)人スポーツ庁(2019)「体力・運動能力調査」
<https://www.next.go.jp/sports/ability/>
 - (2)文部科学省(2012)「子どもの体力向上のための取組ハンドブック」第1章「子どもの体力向上のために」
https://www.next.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_jcsFiles/fieldfile/2012/07/8/1321174_04.pdf
 - (3)武蔵野学院(2007)「学校における運動器検診ハンドブック」第1章第1節(4)公益財団法人日本サッカー協会(2019)「サッカーボックス、リッカー選手登録数」年度別登録数
https://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/player.html
 - (5)文部科学省(2007)「小学校学習指導要領 第2章各教科 第9節体育 142-155」
 - (6)近畿大学(2018)「第7章 初等体育科教育の実践①-体づくり運動系初等体育科教育」ミネルヴァ書房、77-88
 - (7)文部省(2000)「体づくり運動」小学校体育実技指導資料第7集、東洋館出版社

各測定項目の年次推移が示すことは?

このように年次推移をみていくと、測定項目により低下傾向が続いている項目、一時的に低下はしたが、近年は向上傾向にある項目があることがわかる。子ども達の体力・運動能力の低下の要因の一つとしては、生活環境における三問(時間・空間・仲間)の減少が考えられている。

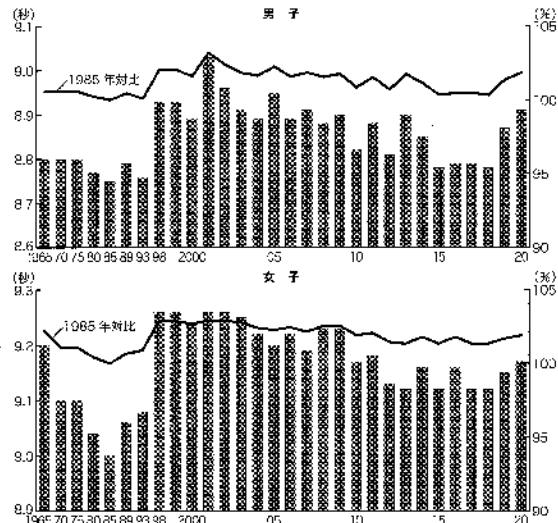


図3 50m走の年次推移 (11歳)

体力・運動能力の年次推移を考える際、子どもの生活環境の変化を考えることは重要なことである。

まず、低下傾向が続いている項目は、握力とソフトボール投げである。握力が低下した要因の一つとして、日常生活のなかで手を使う場面が少なくなったことがある。例えば料理で使う缶切りや瓶の蓋をあけること、そして、水道の蛇口を捻る動作

などをする必要がなくなったことにより、手を使う機会が減少し、握力が低下してきているものと考えられる。

ソフトボール投げの記録低下の要因については、三問の中の「空間」の減少によるところが大きいと考えられる。近年では、安全を考慮してボールを使った遊びができない公園も増えていく。そのため子ども達がボールを使って遊べる空間が大きく減

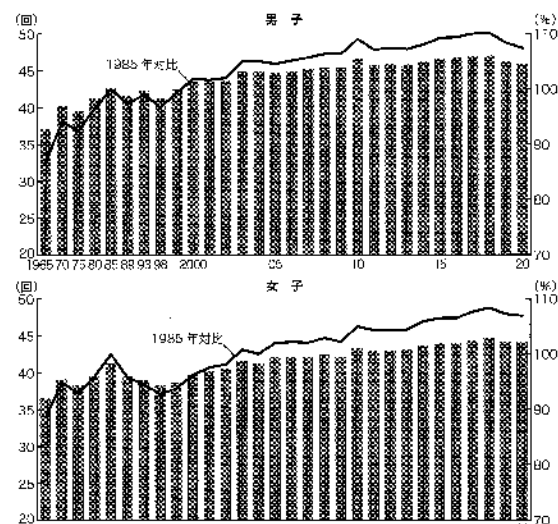


図4 反復横跳びの年次推移 (11歳)

少している。また、他の要因として、スポーツの多様化があげられる。現在では性別や年齢に関係なく、子ども達は多種多様なスポーツ活動を実施できるようになっている。それにより体力・運動能力にも変化がみられることが考えられる。例えば、ボールを蹴る力を測定した場合、12歳以下のサッカー人口が増えていることから考えると、現在の子どもの高い記録が出ること

も推察される。つまり、生活環境の変化も含め時代を反映して子ども達の体力・運動能力も変化するのである。

一方、近年、向上傾向がみられる測定項目は、50m走と反復横跳びである。特に反復横跳びについては、最も体力・運動能力の高かった1985年頃と比較しても向上している。この測定項目で共通していることは、1985年からは一時期低下しているが、その後1999年頃から測定記録が向上し始めている